
『slave』

想隆 泰気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『slave』

【Nコード】

N74040

【作者名】

想隆 泰気

【あらすじ】

爵位売買と奴隷売買が公然と行われていた時代、世界。その貴族は、美しき奴隷を侍らしながら、それでもけして手を触れようとはしなかった。

（前書き）

- ・ 思いつきショートショートですがよろしければ。
- ・ 設定的にすでにあれなのでR15とさせて頂いてます。

何故、何もされないのですか　と、彼女は言った。

奴隷商人から彼女を譲り受けて、実に一年ほどが過ぎた時だった。

僅かに逡巡してから、何も、とはどういうことだ、と私は問うた。
彼女は、奴隷とも思えぬ奥ゆかしい表情で言った。

「……ご主人様の下へ身を寄せるようになって一年。その間、ご主人様は、わたくしに指一本触れようとはなさいませんでした。……無知なりに全てを覚悟しておりましたから　……戸惑っています」

私は僅かに沈黙してから、そうだな、と答えつつ、カップの中の茶を飲み干した。

それを見るや、問答の途中であるにもかかわらず、私の貞淑な奴隷は、すぐさまカップの中に新たな茶を満たしてくれる。

……この一年で私が彼女に求めたことと言えば、こんな当たり障りのないことくらいだった。

湯氣を立てる茶を一口啜ってから、何か不満があるのか、と彼女に問うた。

彼女は少しだけ逡巡したが、間もなくおずおずと言葉を紡いだ。

「……わたくしは、ご主人様を買われた身です。ご主人様の仰ることで、求めることならば、どんなことにも従います……それがどんなことであっても、不満などありません」

ならば、何故、戸惑う？

「……わたくしは、ご主人様に隷属する身です。どんなことをされ

ようとも不満など申し上げません。……何をして下さっても良いのです。……触れて下さっても良いのです。お望みならば、どんなご奉仕でもいたします。……ご主人様は、わたくしをお側に置いてくれて、綺麗な服を着せてくれて、美味しいものを食べさせてくれて、優しい言葉をかけてくれて……でも、触れようとはいたしません」

わたくしは、ご主人様の何なのでしょうか。そう言って、彼女は俯いた。

確かに、私の彼女に対する態度は、金で買った相手にするそれではないのだろう。それを意識してこなかったわけではないし、矛盾を感じなかった訳ではない。

だが、私は、その嘘を是正するつもりはなかった。その意味が無かったから。

綺麗な服も、美味しい食べ物も、全ては私が与えたいから与えているもの。お前にしてみれば、『昔の生活』を取り戻したのと変わらないのだから、そこに疑問を持つ必要などない。……そう、嘯いた。

だが彼女は、この従順な一年間の中で、初めて私の言葉に頷かなかった。

「……かつてのわたくしを、ご存知なのですね」

それが、わたくしに良くして下さる理由ですか……と。奥ゆかしくも、譲らぬ気迫を覗かせる言葉だった。

……私も焼きが回ったものだと思った。こんなことで動揺して、口を滑らせてしまうとは。確証はなかったが、それは、核心にも近い失言だった。

昔話をしよう。

私は子供の頃、とある革細工職人の徒弟だった。まともに仕事など出来ない未熟者だったから、商品納入の使いを主な仕事としていた。

その得意先の一つに、とある貴族の家があった。今にして思えば、さして大きな家ではなかったかもしれないが、当時の私にとってはあまりに恐れ多い存在だった。

初めて使いへ出向いた日のことだ。私は、その豪奢な屋敷の佇まいに興奮していたのか、広大な敷地の中で迷子になってしまった。歩けど歩けど門は見えず、私は激しい焦燥を感じながら、長い時間を彷徨い続けた。

そうして、一人の少女に出会ったのだ。

彼女は幼いながら、眼を見張るような美しいドレスを身に纏っていて、一目で私とは住む世界の違う人間だと知れた。

けれど、散々道に迷い、途方に暮れていたあの時の私にとって、彼女は唯一の救い主だったのだ。

私は、本来であれば話しかけることすら憚られる彼女に、嬉々として門までの道を尋ねた。

彼女は、ふいに現れた闖入者に、瞬間、不思議そうな顔をしたが、やがてにこりと笑うと　一緒に遊ぼう、と。そう言った。

自分の身に何が起きているのかまるで分からなかった。だが、彼女の笑顔のあまりの眩しさに、私は彼女に手を引かれるまま、いつしか己の立場も忘れていた。

以来、私はその屋敷に使いに出される度、十は下であろう彼女の笑顔を、心から求めるようになった。

だが、元々が相容れない仲であったのだ。幼稚な逢瀬が禁じられるのに、さほど時間は掛からなかった。私は屋敷に足を踏み入れることを禁じられ、以降、二度と彼女の笑顔に会うことはなかった。

周囲から厳しく戒められた私は、幼い恋心を忘れるかのように、職人としての修行に打ち込んだ。数年の内には一人前の職人として認められ、幸いなことに、独立して始めた皮革加工事業も成功して、工房は見る間に巨大なものになっていった。

職人としてより、豪商として世に名が轟き始めた、丁度そんな頃だ。懇意にしていたとある貴族が、爵位売買を持ちかけてきた。正直安い買い物ではなかったが、私は、さして迷わなかった。

金銭と引き替えに、私は爵位を譲り受けた。かつては、平民出身の職人見習いでしかなかった私が、貴族の仲間入りだ。成り上がりと揶揄する者も少なくはなかったが、私は満足だった。過去を、取り戻したような気がしていたから。

だが、そんなものは自分の勝手な幻想だった。失われた過去は決して戻らない。

かつて私が使いに出ていたあの貴族は、疾うに没落していたのだ。私が爵位を買い上げた貴族と同じように。あの少女も、もはやいずこにいても知れなかった。

そんな折、私は一人の奴隷商人と知り合う。何のことはない。彼らは金の臭いに敏感だ。成り上がりの成金貴族にすり寄ってくるのは当然のことだった。

正直気乗りはしなかったが、空しさを誤魔化すように、私は彼に導かれるまま、その薄暗い窟に足を踏み入れた。

そう、そこで。私は、彼女を見つけたのだ。

もちろん、少女と最後に会ったのは遙か昔のことだ。家柄以上に倫理的に許されない年齢の少女だった。私の中の彼女も、彼女の中の私も、仮に彼女が彼女であつたとしても、記憶などあやふやだ。……そんなものは、私の空しい幻想の一つに過ぎなかったかも

しない。

……それでも。彼女は今、確かにここにいる。結局私は、みつともない過去の幻想を振り払うことが出来なかったのだ。

私は、過去の幻想に縋っている。あの時失われたものに焦がれているのだ。……その焦がれているものを、汚したくはない。それが、私の真意。……みつともない本音だった。

こんな青臭い昔話を語るなど、主人にあるまじきことだと思った。私には、もはやそれ以上、私の愛しい奴隷にかけ言葉を持たなかった。

「覚えて……います」

ぼつりと、彼女は言った。

「覚えています……幼かった頃のこと。……毎日孤独だったあの頃のこと。でも、ほんの一時だけ、楽しくて……暖かかった日々を覚えています。……人買いに売られた時、あの時いただいた皮の腕輪は無くしてしまっただけ……あの喜びは、今でもこの胸に焼き付いています」

まさか、そんな都合の良いことがあるだろうか。彼女が彼女本人であるばかりか、私のことを覚えているなど。

……だが、私は腕輪の話などした覚えはない。知っているはずがないのだ。彼女が彼女であって、幼い記憶を留めていない限りは。

「ご主人様……？」

穏やかな声で、私を呼ぶ。

……だが、私に返せる言葉などなかった。だって、そうだろう。彼女が彼女であつたから何だと言うのだ。私は、彼女を金で買ったのだ。……焦がれたものを、金で手に入れようとしたのだ。

一年もの間、何も問わず、何も求めず、ただ側にあるだけの暮らしをしてきた。それは、何のためだった？

私には、彼女に触れる資格など無い。

「……顔を上げて下さい、ご主人様」

ふと、そんな声がすぐ側から聞こえた。

見れば、彼女は私のすぐ側に跪いて、私の膝に優しく手を触れていた。

「ご主人様が、どんな苦しみを抱えていらつしやるのか……わたくしには分かりません。……けれど、わたくしは、今こうしてご主人様の側にあれることが幸せです。どうか……そのような顔をなさらないで下さい」

そんな、暖かな言葉。伝わってくる手の温もりと共に、私の凍てついた心を溶かしていくようだった。

それでも、焦がれたものを汚した自分を、簡単に忘れることなど出来ない。

……逡巡する私に、彼女は言った。

「……ご主人様の望むままになさって下さい。ご主人様の望みがわたくしの望み、ご主人様の願いが、わたくしの願いです。だって、わたくしは、ご主人様の奴隷ですから」

いつかのまぶしい笑顔が、私を包み込んでいた。

私は、許されて良いのだろうか？ 彼女を抱きしめる資格がある

のだろうか？

答えなど分からなかった。

けれど、自分は奴隷だから、と言って微笑む彼女に、私は抗えなかった。

……そうして私は、その夜初めて、私の愛しい奴隷を抱いた。失われた時を取り戻すかのように、何度も何度も彼女を求めた。皮の腕輪の代わりに皮の首輪を与えて、あの幼き逢瀬も忘れてしまいうくらい、激しく、激しく。愛して、抱きしめて、体を重ねて、幾度も幾度も、彼女の中で果てた。

みつともないほどの繰り返しの中で、彼女は何度も、自分は奴隷だから、と呟いた。

……私は、気づいてしまった。主人として何よりみつともなくて、情けない事実。

それを、今はまだ告げる勇氣はない。……けれど、いつかは告げられるだろうか。

……出会ったあの日から。

私こそが、彼女の愛の奴隷であつたと言つことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7404o/>

『slave』

2010年11月6日07時51分発行